



モトーンの雲は低く、まだ雨は降り続いていた。アスファルトの歩道に打ちつけられた雨の一滴一滴が、点から線になり、やがて急流のように排水溝に落ちていく。雨の日を苦にしないのは若さのパロメーターだ、と誰れかが言っていたのを思い出した。濡った水しぼきをあげて車が行きかう。6丁目から新橋方向に歩いていくとアウトフォーカスの世界に入っていくようだ。ヤマハのイルミネーションが午後という時に別れをつけるように見えた。ショーウィンドーの中の、それは静かだった。楽器ではなく博物館に陳列された物のようだった。マイクカバーが生きものように光る。月が満ちて海をよぶようにSGがよんでいた。雨の日の第3日曜日が初めての出会いだった。